

モードは語る

中野 香織

服装が語りかけることとは

外交の舞台では交渉の言語や態度だけでなく、服装もメッセージとなる。アメリカ独立戦争ただ中の1778年、合衆国建国の父の一人、ベンジャミン・フランクリンはフランス宮廷に赴いた際、貴族たちが当然のマナーとしてかぶっていた白いかつらを拒否し、毛皮の帽子を選んだ。

植民地だったアメリカの素朴さを印象づけて、独立戦争への支援を引き出そうとした戦略だった。フランス人の新しい世界への憧れは、彼を歓迎する素地となり、結果としてアメリカの独立は後押しされた。



フランクリンがフランス宮廷を訪れた様子を描いた絵画（アントン・ホーエンシュタイン作、1909年没）

それから2世紀以上がたった2025年。ウクライナのゼレンスキー大統領がアメリカを訪問した際、世間が

フランクリンの毛皮帽

標準的マナーとするスーツではなく、黒いシャツを選んだ。戦時下のリーダーとしての戦闘服であり、ウクライナの苦境を伝えるメッセージでもあった。欧州の首脳たちはそのシンボリックな意図をくみ取ったが、ホワイトハウスの反応は違った。大統領はシャツ姿を揶揄（やゆ）し、記者は暗に「失礼」を指摘した。

服は確かに強力なメッセージだが、それをどう受け取るかは相手側の文化的背景や歴史観、そして個々の先入観に左右される。フランクリンがかぶった毛皮帽はアメリカの素

朴さの象徴であり、ゼレンスキーが着た黒いシャツは戦時下の現実の象徴だった。だが、一方では「斬新で意義深い」とたたえられ、もう一方では「礼節を欠く」と言われる。

服装は一体何を語るのか。私たちが服の背後にある人間の物語や状況をどこまで慎重に読み解けるかが鍵になる。「失礼」はむしろ、背景を想像しようとしめないことだろう。服装は、私たちの理解力と寛容さを図り、映し出す一つの指標にもなりうる。だからこそ、ときに歴史をも動かしかねないほどの影響力を持つ。



次回から「ラグジュアリー・ルネサンス」と改題し、多様な視点からラグジュアリーの本質を探ります。